
君への想い

闇の創始者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君への想い

【Nコード】

N8196T

【作者名】

闇の創始者

【あらすじ】

僕は高校入学と同時にある女の子に恋をした。しかし、臆病な僕は彼女に声を掛ける事もできないまま数日を過ごす、そんな彼女の方から話しかけてきた。僕は彼女と初めての会話をした。そして・

プロローグ（前書き）

僕の作品を初めて見る人は初めまして。以前の作品を知っている人は申し訳ありませんでした。

前回の作品を削除したのは理由があつたためじゃないです、勘違いをして削除してしまいました、読んでくださった人本当に申し訳ありません。

今回は消さないように十分に注意しながらやっていきたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。

プロローグ

その日僕は高校に入学した。
それと同時に『恋』をした。

僕の名前は藍原龍^{あいはらりゅう}、父、母、僕の3人家族だ。
趣味は料理でよくご飯を作ったりしている。
それからついこの前高校に入学した。
そして一目惚れをした。

「龍？朝よ、起きなさい」
そう母さんは言いながら僕の部屋に向かってくる。

「わかったよ・・・」
僕は寝惚けながら返事をする。
そう言っているとガチャッと扉が開く。

「何言ってるの、寝惚けてるじゃない」
そう言いながら母さんは僕の布団を剥ぎ取った。

「さ、寒い・・・」
僕は寝惚けながら取られた布団を腕だけ動かして探すが見つからず
起きる事にした。

「ほら、今日から高校生でしょ！しっかりしなさい」
「うーん、わかってるよ」
などと言っていると母さんは居間に戻って行った。

僕は眠いのを必死に振り払って洗面所に行き顔を洗い終わったあと自分の部屋に戻り、制服を着た。

「少し大きかったかな？」

などと以前母さんと制服を買いに行つてた時の事を思い出す。そんな事を考えながら居間に向かい朝食を食べた。

「あれ？父さんは？」

「今日が出るのが早いのよ」

「ふーん、そうなんだー」

「そんな事気にしないで早くご飯食べないと遅刻するわよ」

「はいはい」

と言って僕は朝食を片していく。ご飯を食べ終わった後歯を磨き、持ち物をチェックをしていつでも出れるようになった。すると、

「龍も、もう高校生かあ、なんだか早いねえ」

「何ババくさい事言っただよ、じゃあいつてきまーす」

「はいはい、いつてらっしゃい」

そう言っ僕は学校に向かった。

学校（前書き）

第2弾ですね、何故だか胸が痛いのは何故でしょう？まあ気にせず
頑張っていけます。感想くれると嬉しいです。アクセス数も増えな
いかなあ・・・

学校

俺は今学校、釘塚^{くぎづか}高校に向かっている最中であつた。

今日から新しく高校生なので友達もほとんど居ない状態での登校、少し寂しい・・・。

「はあ、早く友達出来なかなあ・・・出来なかつたらどうしよう・・・」

こんな事一人呟いてても誰も聞いてないので変人にしか見えない。そんな事で悩みながら歩いてると学校の校門が目に入った。

「ここが今日から通う学校かあ・・・よし!!」

俺は気合をいれ、玄関に向かった。

ここでは玄関にクラス分けの紙が張り出されており、それを見て自分の下駄箱とクラスを確認できる。

「俺のクラスは・・・1年C組か」

俺はクラスと下駄箱を確認したあと下駄箱に靴を入れ、上靴に履き替え1年の棟に向かった。

1年は4階にあるので、それまでは上らないといけない。

運動不足もあつてか4階に上がると俺は息が荒くなっていた。

「これからは運動するか・・・」

そう思い自分のクラスを探すと階段を上がりきったところを右に曲がり少し進んだところにあつた。

クラスに入ると中に居た人たちが一斉に俺を見る。

しかし、すこしするとどうでもいいかのように騒ぎ出す。
俺は黒板に張ってある座席表を見て、自分の席に着いた。

（さて、どうしたのか・・・今は友達もいないし、自由時間とかは地獄だな・・・）

「ねえ」

などと考え事していると声を掛けられた。

「はい・・・？」

そこには黒髪ロングの女の子が立っていた。

「どうしました？」

「あのさ・・・友達って一緒じゃないの・・・？」

女の子は聞きづらそうに言ってきた。

「僕の友達みんな違う高校にいつてしまつてこの高校には僕しかいないですね」

「そうなんだ・・・じゃあさ、良かったら話さ・・・ない？」

この方もいないのかな？

そんな事を考えていた。

「僕でよければ・・・いいよ？」

「よかった・・・ところであなたの名前は？」

「あ、僕は藍原龍だよ、君は？」

「私は河平渚かわひらのなみ、よろしくね」

「うん、よろしく」

（そういえば、この子は・・・受験の結果発表の時にいた女の子に

似てるなあ・・・)

「河平さん」

「渚でいいよ?」

「じゃあ渚で」

「それでどうしたの?」

「そういえば受験の結果発表の会場でさ、茶色のマフラーに赤い手袋はめてた?」

「え、うん・・・そうだけど?」

(やっぱりそうだったんだ、あの時は一際目立ってて可愛かったな・・・)

「実はさ、その時に印象に残ってて似てたからさ、ちょっと聞いてみた」

「そうなんだ」

「そういえば渚はどうして俺に話しかけたの?」

(一人でいる人なんていっぱいいるのになんで俺に声を掛けたんだろつか・・・)

「それは・・・あの・・・」

「・・・?」

「な、なんとなくです!」

（そんな顔赤くしてまで言わなくてもいいのに・・・）

「わかったから、落ち着いて・・・ね？」

そう言うとき渚は深呼吸をして少しずつ落ち着いていった。

そんな事しているとチャイムがなり担任らしき人が教室に入ってきた。

「席に着けー、じゃあ今から体育館に向かうから出席番号順で廊下に整列しろー」

そういうとき皆は一斉に廊下に出て行った。

並び終わり、前のクラスが体育館に向かうとき今度は俺たちのクラスが動いた。

体育館で行われたのは入学式だった。

今日はそれだけで終わり、お昼より前に学校が終わった。

「龍」

「あ、渚どうしたの？」

「家ってどこにあるの？」

「学校出て左の方だけど？」

「お、じゃあ同じ方向だね、一緒に帰らない？」

「いいですよ」

そう言うとき俺と渚は一緒に帰ることにした。

何故か帰る最中は視線があり、凄く複雑な状況のなか帰った。

渚の家は案外俺の家にも近く、お互いに友達がいなかったのでしばらくは二人で登下校する事になった。

「ただいま」

「おかえり、早かったねえ？」

「入学式で早かったんだよ」

「あら、そう」

「今日は疲れたから夜まで起こさなくていいよ」

「わかったよ」

そう言って俺は部屋着に着替え、ベッドに寝転がった。
すこしすると睡魔に襲われ、俺は深い眠りについた。

学校（後書き）

さて、この話からどんどん進んでいくわけですが、何か意見・要望・感想などがあれば言ってほしいです。

m
いつもの事ながら不定期更新です。申し訳ありませんm（
（

告白（前書き）

最近パソコンが出来る時間がないのでなおさら更新が遅くなるなあ
と考えていましたが、携帯で本文書いてパソコンに送ればいいとい
うナイスなアイデアが出てきたのでそれを実行したのですが、完成
間際に充電切れで消えてなくなってしまうました。

告白

「龍、早く起きなさい遅刻するよ」

母はそう言って部屋に入ってくる。

「ん．．．」

俺は眠たかったが母が今にも怒りそうだったので朝からそれはごめんだと

思い、布団から出て居間に向かった。

居間に向かうとテーブルには自分の分の朝ごはんが置いてあった。

「早く食べちゃいなさいよ」

母はそう言って椅子に腰掛ける。

俺も椅子に座り黙々と朝食を食べ始めた。

あっという間に朝食を片付け、自分の部屋に戻り制服に着替え、学校に行く準備をした。

「おっと、そろそろ待ち合わせの時間に合わなくなるな．．．」

などと呟きながら玄関に向かい、母に「いってきます」と言っただけで家を出た。

待ち合わせ場所は俺の家からそう遠くない場所にあるため時間に問題はない。

だが、渚は先に来ていた。

「ごめん、待った？」

「うっん、そんな事ないよ、今来たところだし」

「そうか、よかった・・・でもさ、こんなやりとりってカップルみたいだね」

「え？か、カップル?!」

「みたいだねって」

「わ、私と龍君がか、カップル・・・」

渚は顔を真っ赤にしたまま同じ言葉を繰り返していた。
俺はこれ以上はまずいと思い渚を引きつれ学校に向かった。
結局渚は顔を真っ赤にしっぱなしで教室に着いてしまった。

「じゃあ、また後でね」

そう言っただけで渚は自分の席に向かった。

だが、自分の席に着いてもまだ友達がいなかったので
こういう時間は暇になってしまふ。

結局ばーっとして時間は潰れた。

チャイムが鳴ると同時に担任が教室に入ってきた。

「静かにして席につけー」

そう言っただけで朝のHRが始まった。
だが入学早々大事な連絡が特に無かったので軽く聞いていた程度だ

った。

そうして朝のHRは終わった。

終わるとまたクラス全体が賑やかになり、俺はまた暇だなと思いいながらも

何かすることがないか探してみるが特に見つからずに結局トイレに行っただけで終わってしまった。

すると早めにチャイムが鳴ったので自分的には驚いていた。

「じゃあ1時間目始めるぞー、まあ今回は自己紹介で終わるかなーって事で1番から

順に自己紹介していけー」

まあよく考えれば『藍原』だからほとんど1番だよなあ・・・などと考えつつ教壇に立った。

「えっと、藍原 龍です、気軽に話しかけてくれると嬉しいですこれから1年(?) よろしくお願いします」

「なんだそれだけか? まあいいや、何か質問したい事とかあるかあ? 」

と担任が質問するが誰も何も無く、次の自己紹介へと移動する。

終わった後は自己紹介は聞いていたがまったく頭には入って来なかった。

気づくと担任の自己紹介に入っていた。

「えーつと俺は勝谷 かつたに まさる 勝だ、担当教科は現代史だな

まああとは個人で聞いてくれればその都度答えていく、以上だ」

そいつって担任の自己紹介が終わって少しするとチャイムが鳴り

1時間目が終了した。

休憩時間に入ってまた憂鬱だな、と思っていると

「えっと、藍原だっけか？」

「え？そうだけど」

「俺と仲良くしてくれへんか？友達出来なくて寂しくてなあ・・・」

「俺も探してたところだよ」

「本当か、そりゃよかった」

「で、ちなみに名前は？」

「さっき自己紹介したやんけ・・・まあいいや、高村^{たかむら} 浩太^{こうた}や、よろしくな」

「ああ、よろしくな」

そう言っただけ俺は話し相手が出来た。

2時間目、3時間目、4時間目はオリエンテーションで特にやる事がなく浩太と話していた。

昼になって、お昼ご飯は何処で食べようか悩んでるところ

「ねえ、龍君」

「ん？渚どうしたの？」

「お昼一緒に食べない？相手いなくて・・・」

「うんいいよ、実は俺もなんだよ」

「じゃあ屋上空いてるらしいからそこに行ってみよ」

「了解」

そういつて俺と渚は屋上へ向かった。

「おおー風が強いなあ・・・」

「でも良い景色だねえ」

「ここは穴場かもなあ・・・」

「だねえ・・・」

「じゃあお腹も空いたし食べようか」

「うん」

そう言つて弁当を食べ始めた。

始終他愛のない会話で盛り上がっていた。

すると楽しい時間はあっという間に来るもので予鈴のチャイムが鳴った。

「あの、龍君・・・」

「ん？どうしたの？」

「これからも・・・お昼ご飯とか登下校とかしてくれる・・・かな？」

「俺なんかでよければいいよ、登下校の話は約束したんだからいまさら

言わなくても一緒に登下校するよ」

「よかったぁ・・・」

「じゃあ教室に行こうか」

「うん」

そう言っただけで俺らは教室に向かった。
教室に向かうと何故か騒がしかったので近くにいた
浩太に聞いてみた。

「どうしたんだ？」

「龍！！お前と河平さんのことで話になってんだよ！！」

「は？」

「昨日の下校の時と今日の朝の登校とお昼の一緒に食べるに言ったのが噂されてんだよ」

「どっいつ噂だよ」

「河平さんとお前が付き合ってるって噂だよ」

「はあ?!俺と渚が付き合ってる?!」

俺は驚いた拍子につい大きな声で言ってしまった。

当然その声に反応してクラスにいる皆がこっちを見る。

その時偶然にも渚と目が合った、渚は顔を真っ赤にしてそつばを向いてしまった。

俺はみんながこっちを向いてるのを気にせずに浩太と話を続けた。

「で、実際どうなんだ?付き合ってるのか?」

「んな訳ないだろ・・・俺はただ惹かれてるだけだよ」

「惹かれてるねえ・・・俺は河平さんもお前に惹かれてると思うけどなあ」

「そんな訳ないだろ」

などと話して今日一日の授業が終わった。

そして放課後になり、ある程度人が帰った頃ぐらいに

「龍君・・・」

「ん?帰るか?」

「う、うん・・・」

渚は少し気まずそうに頷いた。

帰ってる最中しばらくは無言だった。

が、

「あのさ・・・渚」

「ん？どうしたの？」

「今日の噂の事なんだけど・・・」

「うん・・・」

「俺のせいでこんな噂流れちゃってごめんね・・・」

これからは一緒に登下校もお昼ご飯も一緒になくていいよ」

「え・・・」

「そういう事だからさ・・・」

「待って!!--」

「え・・・」

「わ、私は・・・別に嫌なんかじゃなくて・・・
むしろ嬉しいというか・・・あの・・・その、とにかく」

「え？どういう事？」

「す・・・です」

「ごめん、よく聞こえない・・・」

「好きなんです!!--」

「え・・・本当に・・・？」

「だから、もっと一緒に登下校したいし、一緒にお昼ご飯だって食べたいの！！」

「渚・・・」

「・・・何？」

「俺も好きだよ、渚」

「・・・嬉しい」

こうして俺と渚は付き合うことができた。
入学2日目にして結ばれたのだった。

「ただいまー」

俺は真っ直ぐに自分の部屋に向かい、部屋着に着替え
今に向かうと父と母が晩御飯の用意をしていた。

「お、今日は珍しく家族全員で食べれるんだね」

「今日はお父さんが早かったからね」

などと会話しながら俺も晩御飯の用意をして晩御飯を食べた。
ご飯を食べたあと風呂に入り、眠気が襲ってきたので自分の部屋に向かった。

ベッドに横になり、明日以降の渚との生活を想像して楽しみのあま

りにやけてしまった。
そうこうしている内に眠りについてしまった。

告白（後書き）

はい、第3話です。

まあいつもながら酷い内容ですね。
すいません。

友達（前書き）

前回から更新が遅くなって読んでくれる方々誠に申し訳ないです・

・

遅れてる理由はまあアイデアが浮かばないっていうのものです。

それでも今回たいしたアイデアでてないんですけどね・・・

という事で第4話ですねゝ

友達

「・・・おはよう」

「あら、龍早いわね」

「何か起きちゃった・・・」

俺は少し寝惚け状態で居間に下りて行つた。

「顔でも洗つてきなさい、朝ごはんの用意しておくから」

「うん」

そう言つて俺は洗面所に向かつた。

「おう、龍早いんだな」

洗面所から父さんが出てきた。

「うん、何か起きちゃつてさ」

「そうか、じゃあ待つてるからな」

「うん、わかつたよ」

今日は珍しく俺が早く起きたため朝ごはんを皆で食べれるんじゃないあさつさとかおでも洗うか・・・

そうして顔を洗つた後に居間に戻つた。

そこには朝ごはんが用意されていた。

「ん、いただきますっ」と

俺が来るのを父さんと母さんが待っていたので直ぐに席に着いた。

「それにしても朝に皆でご飯を食べるのもいいもんだな」

「そうね」

そんな他愛のない話をしながら朝食を済ましていった。

「じゃあ行ってくるね」

「気をつけなさいよ」

「わかったよ」

そういつて俺は待ち合わせ場所に向かった。

「ごめんね、待った？」

少し早く家を出たのに渚はもう待っていた。

「大丈夫だよ、今来たところだから」

「そっか、じゃあ行こうか」

「うん」

そう言つて俺と渚は学校に向かった。

「そつえば入学して直ぐにテストあるって言つてたよな」

「そつえばそうだね、勉強とかしてる？」

「まあぼちぼちな？渚は？」

まああんまりしてないんだけどね・・・

「私はあんまりやってないかも・・・」

「そっか、じゃあ今度一緒にするか」

「うん！！」

そうこう話しているうちに学校に着いた。

「おはよう、浩太」

「おはようさん・・・って朝から二人で登校ですかい？」

「あはは・・・」

「まっ、深くは聞かないさ」

「そうしてくれるとありがたい」

「おう」

「じゃあ渚、また後でね」

「うん！！」

そう言つて渚は自分の席に向かった。
俺は一旦自分の鞆を自分の席に置き、浩太の所に戻った。

「昨日の今日でくつついたのかい？」

「深く聞かないんじゃないのか？」

「あの時は河平さんがいたからや」

「なるほどね・・・まあ隠す気はないからいいけどさ」

「で、どうなんや？」

「まあ付き合つてるよ」

浩太に言つてしまったけどよかったのかな？

「ひゃー、早いね」

「まったくだよ・・・俺も驚いてるよ」

「あ、話は変わるんやけど昼一緒に食わへんか？」

「あー、渚もいるんだけどさ・・・」

「じゃあまずいか？」

「後で聞いてみるよ」

「頼んだぜ」

などと話しているとチャイムが鳴った。

チャイムの合図があつて少しすると担任の勝谷が入ってきた。

「席に着け、HR始めるぞ」

そついうと皆席に着き始めた。

「え」と、今日の連絡事項は来週からテストだから勉強は怠らないように、以上!!」

そつ言つて勝谷は教室を出て行つた。

勝谷が出ると皆がまた席から立ち、話し始めた。

「龍君」

「ん? おお渚か」

「あのさ、今日のお昼なんだけど一緒に食べたいっていう友達がいるんだけど・・・」

なんだ・・・渚もか、ならこつちも大丈夫そうだな

「実は俺もなんだ」

「へ?」

「だから俺も一緒に食べたいっていうやつがいるっていう事」

「じゃあいいんだよね・・・?」

「渚がいいならね」

「うん!!じゃあ伝えてくるね」

「おう」

じゃあ俺も浩太に伝えてやるか

「浩太」

「ん?どした?」

「さっきの話だけどいいてよ」

「マジか、やったね」

「まああっちにも人がいるってさ」

「まあ飯食つのは人が多いほど美味いっていうからいいじゃないか」

「そうだな、じゃあそういう事だから」

「おう」

そう言っただけ俺は自分の席に向かった。

「さて、お昼ご飯だ」

「んで、何処で食うんだ?」

「屋上で食う」

「屋上って・・・人いんじゃないの？」

「それが以外にいないんだよ」

「そうなのか」

そういつて俺と浩太は屋上に向かった。
すると先に渚たちがいた。

「お、渚早いな」

「そうかな？」

「うん、でそちらの方がさっき言ってた人かな？」

「うん、そうだよ」

「坂口 さかぐち 刹那 せつな って言なんだ、よろしくな!!」

「藍原 龍だよ、よろしく、でこっちが」

「高村 浩太だ、よろしく!!」

「まあ自己紹介はこのくらいにしてご飯食べないと時間無いよ?」

「そっだね」

そういつて俺たちはご飯を食べ始めた。
新しい友達が出来、これから楽しくなりそうな感じがした。

友達（後書き）

今回は短めにしようと思います。

まあいつも短いと思いますけど・・・

次回はこの話の放課後の出来事などを書こうかと思っております。

まあどうなるかはわかりませんが・・・

この小説を読んでくださってる方いつもありがとうございます
すゝ

でわ、また次回会いましょう

友達2（前書き）

さて、前回の投稿から約2週間くらいすぎましたね。
今回も話は短いですが・・・
この小説を読んでくれるみなさんには感謝します。
でわ、お楽しみください。

友達2

「じゃあ食うか」

そう言って俺たちはお昼ご飯を食べ始めた。

「そういえば、渚って自分で弁当作ってるの？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ朝早く起きて作ってるんだ」

「うん」

「偉いね、坂口さんは？」
と坂口さんに聞いてみる。

「刹那でいいよ」

「じゃあ、刹那は弁当作ってるの？」

「作ってる日もあれば作ってないで学食にしたりするね」

「そうなんだ」

と他愛のない会話をしながらお昼ご飯を食べていった。
すると浩太がこんな事を言い出した。

「今日さ、放課後みんなで遊ばないか？」

「え？」

「いや、今日新しく仲間が出来た事だしお祝いみたいな？
なるほどね・・・」

「まあ、いいんじゃないかな？」

「あたしもいいですけど・・・刹那ちゃんは？」

「構わないよ」

「じゃあ決まり、放課後にまた詳しく話そうか」
という風に決まった。

「さて、そろそろ時間だし教室に戻るとしようか？」

「そうだね」

そう言って俺たち4人は自分達の教室に戻った。
教室に戻って渚と刹那と分かれたあと浩太が話しかけてきた。

「なあなあ、刹那ってどう思う？」

「普通に元気な子じゃない？」

「そうじゃなくてさ・・・」

「じゃあ何だっというんだ？」

「あの・・・可愛いつて思わないか？」

「ああ、なるほど一目惚れか」

「ちょ、そういう事いうなよ!! 恥ずかしい!!」

と浩太が叫んだせいで近くにいた生徒はこちらを見ていた。

「声大きいから、落ち着け・・・な？」

「あ、ああ・・・」

「でだ、どうすんの？」

「何がだ？」

「一目惚れしたんだったらアプローチかなんかするんじゃないのか？」

「まあ、そのために今日の放課後につて予定したんだよ」

「ああ、なるほどね・・・じゃあさ」

「何だ？」

そこで俺たちはある作戦を立てた。

「俺と渚が二人で歩いてたりして、二人の世界にはいつてるのを見計らって

あっちは二人にしておこうぜ、みたいな風にすればいいんじゃないのか？」

「なるほどな、それはいいかもな」

「じゃあ放課後にやるか」

「おう!!」

そう言つて俺たちは浩太の恋を成就させるための作戦を考えたのだつた。

「終わった〜、次はお楽しみのお出かけだ〜」

「じゃあ渚たち呼んで来るわ」

「おう」

俺は渚のところまで向かった。

「渚？」

「うん？どうしたの？」

「いや、もう行こうかって話してたんだけど大丈夫か？」

「うん、準備万端だよ」

「そっか、刹那は？」

「今トイレに行くつて」

「そっか、じゃあ浩太と下で待ってるわ」

「うん、わかった」

そして俺と浩太は玄関で待ってる事にした。

「お待たせ、じゃ行こうよ」

「だね」

そういつて俺たちは街に向かった。

「ところで浩太、今日は何処に行くんだ？」

「あ？とりあえずは街にでてブラブラする？」

「という事なんだけど渚と刹那は？」

「私はそれでいいと思いますけど・・・」

「あたしもそれでいいかな？もししたい事あればその時すればいいと思うし」

「じゃあとりあえず歩きますか・・・」

と、俺たちは作戦を決行することにした。

「渚、これどう？」

「私的にはこっちの方がいいんじゃないかな？」

今俺らは洋服屋に来ていた。

作戦通り俺と渚は二人で服の見立てをして、浩太と刹那が互いの

服の見立てをしている。

このまま上手くいけばいいけど・・・

「龍君、浩太君と刹那ちゃんがくっつけばいいと思ってるでしょ？」

「え？」

「実は刹那ちゃんに頼まれて浩太君と仲良くなりたいうって」

「じゃあ最初から何もしくなくてもよかったんだね」

「そうだね」

そういつて俺たちは安心して服を選んだ。

その後も俺と渚、浩太と刹那で二人になりお出かけは無事終わった。

「じゃあ今日はこれでお開きにしますか」

「だね、じゃあ俺と渚はこっちだから」

「おう、じゃあな」

別れを告げ俺と渚は帰路についた。

そして渚を家まで送り、俺も家に戻った。

「ただいま」

「おかえり、ご飯は？」

「友達と食べてきたからいいかな？」

「わかったわ」

「じゃあもう寝るね、今日はなんか疲れたし」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

そう言っ て俺は自室に戻り、着替えてベッドに倒れこみそのまま寝てしまった。

友達2（後書き）

すいません、途中で自分でも何書いてるかわからなくなってしまつて凄くグダグダだと思います。本当にすいません。

話は変わりますがもし感想・要望・意見などがございましたら遠慮なく言って下さい。

勉強会（前書き）

今回は今までより一番短くなってしまいました……本当に申し訳ありません。

時間とアイデアがあればこんなに困らないんですけどね……という事で今回も読んでやってください。

勉強会

「龍君、ここってこの公式でいいの？」

「いや、ここはこの公式を使うんだよ」

「あ、なるほど、ありがとう」

「おう」

今何をやっているかという勉強であった。

今日は俺の家で渚と勉強会っていう事になった。

渚は俺の向かいに座って黙々と勉強している。

何故勉強をしているかというと来週からテストがあるからだ。

俺は特に悪いわけではなく、むしろ少しいい方だが渚がわからない所があるから教えて欲しい

との事で勉強する事になった。

今は数学の勉強をしていた。

「やっぱり一人でやるより二人とかでやったらわからない所とか教えてもらえるからいいよね」

「そうだね」

そう言っただけ俺は一旦勉強を止め、飲み物を持ってくる事にした。

「はい、お茶だけいい？」

「うん、ありがとう」

「ちょっと一休みしようか」

「そうだね」

俺たちは飲み物を持ってきたのを頃合に一旦休憩をすることにした。そこで俺たちはいろいろな話をした。浩太と刹那の事。来週のテストの事。そのあとにある体育祭の事など。

「さて、そろそろ始めるか」

「もう一頑張りだね」

そしてまた俺たちは勉強を再会した。すこしの間無言だった。

「あ……」

勉強を2人でもくもくとこなしていると彼女が消しゴムを落としてしまったらしい。

消しゴムは丁度2人の間あたりに落ちていたので拾ってあげることにした。

「……！」

「あ」

俺が消しゴムを取ろうとしたときに彼女も取ろうとしたらしく丁度いいタイミングでお互いの手が触れ合ってしまった。

彼女は俺の手と触れると同時に手を引っ込めて少し赤くなりながら俯いていた。

「えっと、ごめん」

「あ、謝らなくていいよ、ちょ、ちょっと驚いただけだから……」

「そ、そうか。うん……はい」

「あ、ありがと！」

俺はその後動悸を落ち着かせる為に勉強に戻った。

渚はという顔と顔を赤らめたまま俯いていた。俺はそれがとても愛おしく思えた。

しばらく渚は俯いていたままだったが少しずつ落ち着きを取り戻していった。

「じゃあ、また明日ね」

「うん、今度は私の家に来てね」

そう言っ渚は帰っていった。

今回の勉強会はよかったんじゃないかなと俺は考えていた。

渚の姿が見えなくなった所で家に入っていた。

勉強会（後書き）

はい、次の更新は未定です。
いつもの事ですね……はい。
という事で感想・要望・意見があったら言ってお下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8196t/>

君への想い

2011年10月7日15時23分発行